

第20回全国大学書写書道教育学会・千葉大会 参加報告

報告者：上越教育大学大学院 清水陽一郎

本文章は、実践場面分析演習の課題の一環として提出されたものを、掲載させていただいています。

平成17年9月21日から23日にかけて、千葉大学を会場に「全国大学書道学会」「全国大学書写書道教育学会」「日本教育大学協会全国書道教育部門会」が開催された。本稿では、「全国大学書写書道教育学会」について概要を報告する。

【第1日目 平成17年9月22日(木)】

研究発表(午前の部)

第1分科会

司会 文教大学 吉沢 義和

長崎大学大学院 江原 理恵

長崎大学 鈴木 慶子

1 小学校1年生の平仮名指導に関する考察

《概要》書写の学習指導は暗黙のうちに「読み」ができていることが前提とされている。しかし、小学校1年生の文字指導について調査を行ったところ、少なくとも1年生の場合は、意識的に「読み」を確認し、フィードバックするような展開が必要であることがわかった。

2 日中の筆順定着度に関する比較研究

- 日中の筆順原則の経緯と児童の筆順実態調査の比較分析から -

東京学芸大学大学院 王 力 軍

《概要》日本では「筆順指導の手引き」が発行され、教科書体活字が統一されたが、現実の字形主義と行書筆順の整合性の視点からの筆順規範はそれに反するものである。現代の筆順規範は機能的側面を考慮した上で、もっと系統化・合理化・広域化・社会共通などの接点に求められる必要がある。

3 小学校国語科書写における漢字学習への連動を視野に入れた毛筆指導についての一考察

静岡大学・静岡大学附属静岡小学校 杉崎 哲子

《概要》総合初等教育研究所発行「教育漢字の読み・書きの習得に関する調査と研究」の誤答分析を通して、活字の氾濫など非意図的学習による学習者の書写的見方の欠如が明らかになった。書写学習で既習や新出漢字の取り立て指導を行う際は、書写学習から漢字学習への「連動」を視野に入れての展開が重要となる。

4 書写に対する興味・関心を高めるための一試案 - 用具・用材としての「筆」を中心として -

東京学芸大学附属竹早中学校 松本 貴子

《概要》書道用具・用材への興味関心を高めていくことで、より多くの生徒の意識の高揚につながるのではと考えた。そこでビデオを視聴し、様々な筆を用意し、触ることで関心が生まれ、それらは実際に書くことで意欲へと繋がっていくことがわかった。

第2分科会

司会 広島大学 松本 仁志

1 書写教育における基本点画の学習指導の階梯研究 - 教員養成課程を中心にして -

東京学芸大学大学院 本田 容子

東京学芸大学 加藤 祐司

《概要》本学の書写履修学生を対象とした基本点画の基礎調査結果と学年別漢字配当表の分析を照合したところ、基本点画や筆づかいの学習における具体的な学習指導階段を設定することの有意性が見えてきた。

2 一人ひとりの学習の歩みを追跡することによる授業の再構築

長崎大学 大森アユミ

長崎大学教務職員 林 朋美

《概要》本学における「楷書法」の授業において、ポートフォリオを用いた学習者の自己モニタリングの具体的な効果を検証したところ、「試書」と「まとめ」の写真、評価規準表、そして臨書学習時の参考になる作品の提示は有効であることがわかった。

3 左利き者の望ましい硬筆筆記具の持ち方に関する文献的考察 - 書写教育の見地から -

長野県松本深志高等学校 小林比出代

《概要》左利き者を、右利きの方が社会生活の上で便利との理由だけで利き手変更させることは、生物学及び心理学の見地から考察すると、失語などの危険が生じる。利き手は発達段階における各人の自然な姿を尊重すべきであり、左利き者に対する望ましい筆記具の持ち方や用紙の置き方などを工夫することが望ましい。

4 京都における書写書道教育史研究 - 京都市学校歴史博物館の取り組みと収蔵品を中心に -

熊本大学 神野 雄二

《概要》京都市学校歴史博物館における書写書道の文献や教科書などの分析により、全国に先駆け教育の重要性を認識し、番組小学校を設立するなど、幕末から明治初期にかけての京都が官民一体となって教育にかけた熱意を確認することができた。各都道府県でも手遅れにならないうちに、書道史や書写書道教育史の編纂を行う必要がある。

第3分科会

司会 新潟大学 岡村 浩

1 生涯書道学習における段級位制度についての考察

静岡大学 滝口 雅弘

(財)日本習字教育財団 葛西 孝章

《概要》段級位制度についてのアンケート調査を分析したところ、段級位とは指導者や各団体で一方向的に認められるものであること、広域に統一された基準をもたないことが問題点として指摘される。また、必ずしも全ての学習者にとっての要求を充足させる絶対的なものではない。従って、それに頼るのではなく、発表会や公的資格への挑戦、社会的評価の機会の拡大が今後の課題となる。

2 書字活動と脳の高次機能の発達について - 歴史的な体系化と教育への応用 -

早稲田大学大学院履修生 川原 淳

《概要》「手で文字を書く」という教育上の意味を、脳科学の分野で研究の前提となっている「言語野の発達は人類の直立と関係がある」「言語野の発達は人類の手仕事の発達と関係がある」点に注目し、手の細かい動きと文学史との関連の中で分析を行った。コンピュータが台頭する社会ではあるが、脳の進化の源である手と、手で文字を書き下ろすことによって育み維持される、脳のシステムや情報処理能力について、検証し直すべき時機が到来している。

3 枠内書字における漢字の大きさの統一感に関わる要素

上越教育大学 押木 秀樹

上越教育大学大学院修了生 武田 卓也

《概要》文書の読みやすさに関係する、枠内書字における漢字の大きさを規定する要素について、大きさに統一感のある漢字を対象として、文字の外接矩形の文字枠にしめる平均的な割合を調査した。そして、そこに偏差を生じさせる要素について分析を行ったところ、上下左右の余白を枠の15%程度取ること、れっかを含む字種を除いた画数の多い時は大きめにすること、外側が文字枠と平行線で

構成される字種は小さめにすることを、学習内容として提示して良いことがわかった。

第20回全国大学書写書道教育学会 総会

総合司会 武蔵野大学 廣瀬 裕之

研究発表（午後の部）

司会 兵庫教育大学 小竹 光夫

1 書道療法の可能性とその問題点 - 精神科における実験結果から -

神戸松蔭中・高等学校 小松恵理香

大阪教育大学 河合 恵

《概要》書道を非言語的精神療法の一分野である芸術療法の視点から捉え、書道を療法として導入することには、どのような意義を持ちうるのか、またどのような問題があるのかを明らかにするべく、総合失語症の患者に書道を行ってもらい、前後の脳血流の変化、総合失語症の評価法PANS Sを分析した。その結果、書道活動には局所脳血流を活性化させ、総合失語症の症状を改善させるという療法的効果があることが証明された。

2 学習者の言語活動に機能する国語科書写のあり方について

横浜国立大学 青山 浩之

横浜国立大学附属横浜小学校 柳澤ももこ

横浜市立浦島小学校 藤原 悦子

《概要》小学校6年生と高校生を対象にした「筆使い」「字形」「配列・配置」の調査から、それぞれの段階の書字能力の実態、伝達機能的な書字を支える「目的意識」「相手意識」の実態を分析したところ、特に目的・相手意識の面で高校生段階の低迷が指摘できた。そうした実態をふまえた国語の「書くこと」に書写学習を有機的に関わらせた小学校2年生の実践により、学習者にとっての明確な目的・相手意識をもつことが書字行為全体の意識を上げ、文字にも変化が見られることがわかった。

3 「書く」ことに関する基礎研究（二） - コミュニケーション論の視点 -

東京学芸大学 豊口 和士

《概要》社会の変化によるコミュニケーション能力の低下について、「書くこと」を扱う書写教育はいかにそれを捉え、対応していくかが問われる。そこで、「書き言葉」がコミュニケーションにいかにか機能しているかを考察した。その考察を通して、改めて書写教育が抱える問題点を解決するヒントは、コミュニケーション論の視点にあることが浮き彫りになった。

4 香川松石遺品の折手本百冊と明治期習字教科書群との関連

四国大学 久米 公

長崎大学 鈴木 慶子

平和情報センター 保田 明夫

《概要》香川松石（1845～1911）が千葉師範学校で指導に用いた楷・行・草・手紙文の折手本百冊と、松石が携わった明治期習字教科書840冊余との関係について、その研究推進のために、「規範的手書き文字による教科書教材データベース」を構築中である。平成18年3月に明治20年分までが公開予定であり、研究成果については、四国大学言語文化研究所のホームページや国立情報学研究所を通じて公開される。

若手研究者による懇話会

三学会合同懇親会

【第2日目 平成17年9月23日（金・祝）】

全国大学書写書道教育学会 創立20周年記念シンポジウム「これからの書写・書道教育学」

1 大学生の文字を書くことに関するアンケート（結果報告）

和洋女子大学 塚本 宏

《概要》全国大学書写書道教育学会では、平成17年4月から5月にかけて、本学会に加入する全国各大学の書写書道に関わる科目を受講する学生から、文字に関する意識や手書き文字の実態調査を行

った（10年前にも今回の調査とほぼ同様の内容による調査を実施している）。

集計結果として、次のような大学生の姿が浮き彫りになった。

- a. 今回のアンケート結果について概括すると、
「全体の傾向としては「書き文字」も「文字に関する意識」も、10年前と大きな変化がない」と言うことができる。
- b. 文字に関する意識や実態の最大値で描くと、次のような大学生像が描かれる。
 - ・文字を書くことは好きだが、自分の字は好きでも嫌いでもなく、読みやすい字が好き。
 - ・書体では行書に興味があり、手書きの文字が好きで、手紙は手書きでもらった方が嬉しい。
 - ・ノートはシャープペンで書き、はがきも手紙もボールペンで書く。
 - ・横書きが好きで、横書きの方が書きやすく読みやすい。
 - ・正しい姿勢で書くことが大切だと思っているが、自分の姿勢はやや悪い。
 - ・正しい鉛筆の持ち方が大切だと思っており、自分の持ち方は普通だと思っている。
- c. 書き文字で、10年前と比較して、変化の顕著だった点
 - ・右払いの書き方が、折れを作らずに単純に払うものが多くなった。

2 学会の20年とこれまでの書写書道教育研究（スライド）

東京学芸大学附属竹早中学校 松本 貴子

3 シンポジウム「これからの書写・書道教育学」

コーディネーター 山梨大学 宮澤 正明

昨年度学会ラウンドテーブル報告

- ・テーブル1「書写・書道の学習内容論・教材論などについて」 千葉大学 樋口 咲子
- ・テーブル2「教育課程と書写・書道」 愛媛大学 東 賢司
- ・テーブル3「学習者研究とそのあり方」 安田女子大学 谷口邦彦
- ・テーブル4「授業研究をどのように進めるか」 茨城大学 齋木 久美

《概要》 昨年のもとの重複するため、ここでは割愛する。詳細は次のホームページに詳しい。

> <http://www.soc.nii.ac.jp/jacse/Ki roku/2004roundtable/index.html>

（全国大学書写書道教育学会 2004 徳島大会 ラウンドテーブル概要）

シンポジウム

- ・「書写書道の学習内容として何が求められ、何を研究すべきか」

パネラー 上越教育大学 押木 秀樹

《概要》

* 次のパラダイムへの糸口になる可能性があるのは、次の3点にまとめられる。

- A. コミュニケーションにおける、文字言語のパラランゲージへの着目（対相手の意義）
- B. 文字を書くことの運動としての認識および身体性（対相手・個人内の意義）
- C. 文字を書くことによる精神的作用や教育的効果（個人内の意義）

*（Aに関して）

音声言語では、ノンバーバルコミュニケーションの要素の一つにパラランゲージが挙げられる。

では、文字言語によるコミュニケーションにおいて、パラランゲージ的な要素はないのか。

あるとしたら、コミュニケーションにおける効果と教育の必要性はどうか。

パラランゲージ的要素はどこにあるのか。

*（Bに関して）

表現する力や身体を用いて表すことについては、従来の「芸術」「書道」の枠にとらわれない構造が必要か。

できあがった字に着目する学習活動から、字を書く動作や行為に着目した学習活動を重視する方向性は、速書き・文の中で文字を書くこと・身体活動性・表現などの各場面につながる。

* (C) に関して)

情緒の安定などの点で、字を書くこと、特に毛筆で字を書くことは効果があるのではないか。

体験的に感じているレベルから、脳に関する研究等による立証レベルに高めることが必要。

一般の人が書写・書道に求めているものを再確認することが必要。

書写・書道は、情報機器やバーチャル環境の普及によって希薄となりがちなコミュニケーションと、「ことばを書く」という点で深く関係するという点で、本来は重要な役割を担っているはずである。

・「書写・書道教育学における教育課程研究のこれから」 パネラー 広島大学 松本 仁志
《概要》

* アクション1：文字を書くことの機能の全体像（構造）を明らかにする必要があるということ（原理研究）

機能の全体像が未だ不明である。

文字を書くことの機能を明らかにすることは、目標論、学力論、教育課程論を論じるための大切な条件である。

他の言語活動「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」との関わりの中で文字を書くことの機能を考える必要がある。

* アクション2：これまでの教育課程の成果・問題点・改善点をこれからの時代を見据えて分析・整理する必要があるということ（教育課程論研究）

これまでの教育課程（国語科書写・芸術科書道）を振り返り、国語科書写と芸術科書道の関係を従来通りに考えるか、切り離して考えるか。

* アクション3：何のためにどのような学力を育成するかという目標及び学力の措定が必要であるということ（目標論研究、学力論研究）

これからの時代に育成すべき書写力または書表現力・鑑賞力・感じる力などをどのように捉えるか。

時代（社会）の要請という条件をどのように勘案するのかを検討する必要がある。

* アクション4：どのような枠組みの中でどのように計画を立てて目標を達成するかということ（教育課程研究）

教育課程における教科の枠組みは絶対ではない。

書写・書道の教育課程を構成する主な要素と具体化のイメージをもつ必要がある。

・「学習者研究とそのあり方」 パネラー 長崎大学 鈴木 慶子
《概要》

* 学習者研究において、学習者の実態把握と学習者（発達）研究とは異なる。

学習者の実態把握とは、教科内容を軸にして学習者の現実を捉え、教育しようとすることに対して学習者には現在何ができるのか、また用意された内容を学習者に獲得させるための効果的な方法を探究することである。

学習者（発達）研究とは、学習者の発達を軸にして教科内容を再編するとともに、学習者の潜在可能性に着目し、現在はできないとしても援助を与えれば何が実現されていくのか、また学習者の自発性を引き出す最適な内容と方法を探究することである。

* 書写書道教育における学習者（発達）研究の必要性和意義

「教育課程と教育制度は、子どもの発達過程を基礎として構成されなければならない。」

「あるべき教育内容を科学的に決める基準は、発達段階にある。発達段階の把握に対応し、しかも、次の発達段階への移行を支える教育課程の編成は、発達段階の科学的な把握を抜きに考えられない。」

「教育は発達の源泉ともなるべきものであり、発達を知らずして教育の実践とその評価は不可能である。」

(以上『小・中学校の発達と教育 - 子どもの発達のとらえ方 - 』p55~56 秋本英則ほか著 創元社刊 1977)

各段階の発達課題を援助する書写書道教育は、文字を書くことの機能と教育を学習者の発達を追って検証・実証・見直していく作業であるべきである。

* 学習者（発達）研究の観点、方法、及び書写書道教育における「生涯発達の各段階と課題」の構想

学習者（発達）研究の観点

- ・発達の動向、発達の特徴の記述
- ・発達の条件の分析
- ・発達の原動力・原因の研究
- ・発達の法則の発見

研究方法

- ・実験的方法
- ・相関的方法
- ・事例研究法
- ・横断的方法
- ・縦断的方法

事例研究の例 ... 省略

書写書道教育における「生涯発達の各段階と課題」の構想

- ・30周年記念大会では、少しでも細やかで骨太の「生涯発達の各段階と課題」が共有できるように、研究室から教室へ、教室から研究室へ、の情報交流を -

・「書写・書道教育学における授業研究の方向性と方法について」

パネラー 横浜国立大学 青山 浩之

《概要》

* 書写・書道教育の授業研究は、教科教育学としての実践知と、教科学・教育学に資する実践知の2つの方向性に分けられる。

* 書写・書道教育におけるこれからの意図して、授業研究のパラダイムは次のようにまとめられる。

(過去) 技術論レベル

(教材研究 授業方法)

: 「何を教えるか」 「どう教えるか」の論理

(現在) 学習指導論・授業論レベル

(学習内容・学習者論 学習指導過程論 授業方法の一般化)

: 「いかにして習得するのか(学ぶのか)」「いかにして学習が成立するのか」の論理

(今後・提言) 包括的授業研究レベル〔仮称〕

(学習内容・教材・学習者論 学習指導過程・授業方法論)

: 「教室の出来事から分かることは何か」の論理

* 書写・書道教育における授業研究の方向性の具体化

実践研究と理論研究、方法論と内容論を対立的な構造で捉えず、授業研究を通して、すべてを包括した実証研究

- ・実践の深化
 - ・方法の探究
 - ・理論の構築
 - ・内容の究明など
- 関連領域へ共有化・一般化・概念化

* これからの書写・書道教育における授業研究の方法と観点

文字を書くことの機能とその教育を授業の観点から捉え、実践知として究明することが必要

【文責 清水陽一郎】